



絵本の語りと視点 : 日本語の主観的把握に着目して

目黒, 強

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 特別:31-41

(Issue Date)

2016-06-21

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/E0041048>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041048>



絵本の語りと視点

—日本語の主観的把握に着目して—

Narrative and Point of View in Picture Books: Looking at Subjective Construal of Japanese

目黒 強*
Tsuyoshi MEGURO*

要約: 日本語の絵本の語りにも認められる主観的把握傾向について、英語版と比較しながら分析した結果、次のことが示唆された。①人称制限の解除・歴史的現在・現在と結び付いた「た」については、登場人物視点の語りで使われる傾向が示唆された。一方、英語版では、主観的把握が客観的把握に転換されていた。絵の視点については、日本語版の語りにも認められた登場人物視点の第三者視点で描かれる傾向が示唆されたが、視座を視点人物に近づけたり、追尾視点にしたりするなどの工夫が指摘できた。②共同注意態勢については、現象描写文との共起が示唆された。絵の視点については、語りの視点と一致していた。これは、三人称小説の語り手の「見え」が第三者視点で描きやすいからだと考えられる。なお、英語版では、「よ」「ね」「のだ」に相当する文法的手段がないため、共同注意態勢は反映されていなかった。以上のことから、絵本の語りにおける主観的把握については、登場人物の「見え」を通じた主観的把握と語り手の「見え」を通じた主観的把握が明らかとなった。語り手がゼロ化する前者の語りは一般の小説にも認められる技法であるが、語り手が人格化される後者の語りは幼年童話や絵本に特徴的であると考えられる。

1. 問題の所在

近年、絵本研究では、ドゥーナン (1993=2013) のタイトル (*Looking at Picture in Picture Books*) が示しているように¹⁾、絵の分析方法に関する研究が相次いで発表されている (竹内, 2002、藤本, 2007)。

しかしながら、絵本の語りの分析方法に関する研究については、管見の限りでは、あまり見受けられない²⁾。もちろん、絵本における絵と文章の関係については、「対称・重複」「補完」「敷衍・増強」「対立・矛盾」という枠組みを示したニコラエヴァほか (2001=2011) をはじめ、先述した研究でも取り上げられているが、日本語の言語特性として指摘されている主観的把握傾向を踏まえた研究については、成岡 (2013) などが散見されるに過ぎない。

ただし、成岡 (2013) では、文章による語りのみが分析されており、語り手の視点とともに物語世界の現われを方向付ける絵の視点については分析されていない。

そこで、本稿では、絵本の主観的把握傾向を分析する方法を検討し、絵の視点との相互作用を視野に入れながら、日本語の絵本にも認められる語りの特徴を探ることとした。

2. 分析方法

本節では、認知言語学の立場から日本語の主観的把握傾向を明らかにした池上嘉彦の知見を中心に整理し、本稿における絵本の分析方法を述べる。

(1) 主観的把握

池上 (2006: 22) は、言語による事態の認知方法として客観的把握と主観的把握を指摘した。客観的把握では「話者は認知の (そしていずれば発話の) 〈主体〉として、把握の対象とする事態とは間をとり、それを〈客体〉として対立する」とされ、主観的把握では「認知 (そして発話) の〈主体〉でもある話者が言語化の対象とする事態の中に臨場して、いわば〈客体〉と融合し、それを〈主体〉としての自らが体験する (つまり、自らの身体を通して直接経験する)」という。

(a) “Where am I?”

(b) 「ここはどこですか」

(池上, 2006)

知らない場所に来てしまった話し手が自らの置かれている状況

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究所准教授

を確認する場合、英語では (a) のように道に迷っている「私」が対象化されるのに対して、日本語では (b) のように道に迷っている中にある「私」はゼロ化される傾向にある。同じ事態であっても、認知の仕方が異なれば、異なった表現として言語化されるのである。

池上 (2006) によれば、英語母語話者は客観的把握を好み、日本語母語話者は主観的把握を好むという。文法的には正しいのに、「私はどこにいますか」のような言い回しが日本語母語話者にとって不自然に思われるのは、客観的把握に基づくからであろう。

さらに、池上 (2006: 22) は、主観的把握のもとでは「自己投入」³⁾ が起こりやすく、客観的把握のもとでは「自己分裂」が起こりやすいことを指摘している。

把握の対象となる事態の外に身を置いていても、話者は〈自己投入〉(self projection) とでも呼ぶうる心理的操作を通じて認知の主体としての自らを事態の内に転位させ、事態に臨場しそれを直接体験しているかの如く、主観的に把握することも可能だし、逆に、把握の対象となる事態の中に身を置いていても、話者は〈自己分裂〉(self split) とでも呼ぶうる心理的操作を通じて自らの分身を認知の主体として事態の外に措定し、その分身が事態の中に残されたもう一つの自分の分身を含む事態全体を客観的に把握するという構図に変換することもできる。

日本語に特徴的な「自己投入」としては、「親族名称の虚構的用法」(鈴木, 1973) が挙げられる (池上, 2004)。「お父さんのいうことを聞きなさい」のように、話し手が自称詞として「お父さん」を使えるのは、話し手が聞き手に「自己投入」し、聞き手である子どもの立場から自らの立場を規定しているからであると考えられる⁴⁾。

「自己分裂」については、(a) の事例が該当するが、「pride oneself ≒ 誇る」のように、「日本語においては、〈分裂した自己〉(split self) の明示的な指標と考えられる再帰代名詞の使用は避けられている—従って、そのような使用に反映される〈自己分裂〉(self-split) という心理的過程も避けられている」(池上, 2004: 24) という。

(2) 主観的把握傾向の言語的指標

それでは、日本語の主観的把握傾向の言語的指標にはどのようなものがあるのだろうか。ここでは、池上 (2004) が挙げている指標のうち、①心理的述語、②移動動詞 (補助動詞を含む)、③歴史的現在、④現象描写文 (現象文)、を確認したい⁵⁾。

まずは、①についてであるが、心理的述語とは、内的情態動詞 (スル・シタ形)⁶⁾ や状態形容詞⁷⁾などを指す。主文の終止の位置にある心理的述語については話し手しか使うことができないという人称制限が知られており、ここに「日本語の話者の〈自己中心的〉な事態把握」(池上, 2004:3) が指摘できるという (引用箇所の下線部は引用者による)。

(c) 「私は嬉しい。」

(d) ??「彼 (女) は嬉しい。」

(e) “I am happy.”

(f) “S/He is happy.”

(池上, 2004)

(d) が不自然な言い回しに思われるのは、日本語では、英語とは違って、感情や知覚などの心的状態は、当事者のみしか把握できない事態であり、根拠もなく、他人が言及するのは不自然であるからだとされる。ただし、後に検討を加えるが、三人称小説の地の文では、語り手による登場人物への「自己投入」を通して、上述した人称制限が解除されることが知られている⁸⁾。

次に、②についてであるが、「くる・てくる」において話し手が到達点になるという人称制限に主観的把握傾向を指摘している⁹⁾。

(g) 「ハワイが近づいてきた。」

(姫野, 2012)

(g) は、「ハワイ」の物理的移動ではなく、話者の空間的移動に伴い、対象の方が近づいてくるように見えたという主観的把握を言語化したものである¹⁰⁾。客観的把握のもとでは、「私はハワイに近づいていった」となる。

つづいて、③についてだが、歴史的現在とは「過去の出来事を非過去形で表現することによって、今日の前で起こっているかのようにありありと提示する用法」(工藤, 2014b: 674) を指す¹¹⁾。

(h) 「昨日なんか夜 11 時頃に電話をかけてくるのよ。驚いたわ。」

(工藤, 2014b)

(h) については、「かけてきた」ではなく、「かけてくる」のような非過去形を用いることで、その時の出来事が現前する効果が認められる。このような事態把握は、話し手が過去の自分に「自己投入」することで成立すると考えられる。もちろん、英語でも、歴史的現在はいられるが、池上 (1986) によれば、日本語の方が使用頻度は高いという。

最後に、④についてだが、現象描写文とは「話し手の視覚や聴覚等を通して捉えられたある時空の元に存在する現象を、現象の存在への確認は有しているものの、主観的加工を加えないで言語表現化して、述べたもの」(仁田, 1991: 36) を指す (例: 「わずかに風が吹いている」)¹²⁾。

なかでも、池上 (2004: 39) は「知覚する人物、および、そのような人物が知覚したという点は言語化せず、その人物が知覚した内容だけを一見単なる地の文であるかのように言語化する」語りを検討している (引用箇所の斜体は引用者による)。

(i) 見上げると、門の屋根が、斜めに突き出した瓦の先に、重たく薄暗い雲を支えていた。(芥川龍之介『羅生門』)

(j) Looking up, *he saw a fat, black cloud impale itself on the tips of the tiles jutting out from the roof of the gate.*

(T. Kojima 訳) (池上, 2004)

(i) の下線部は、知覚者の「見え」が表現された現象描写文で

あり、知覚者自身と知覚行為はゼロ化されている。一方、(j)では、知覚者と知覚行為が補われ(斜体部分)、客観的把握に転換されている。なお、知覚者の「見え」は話し手に帰属するものであり、現象描写文は話し手しか用いることができないが、(i)では、語り手が登場人物に「自己投入」することで、登場人物=知覚者の「見え」を再現しているという。

以上に加え、主観的把握傾向の言語的指標として、⑤「こ」系の指示詞と終助詞(「よ」と「ね」と「のだ」を追加したい。いずれも、話し手の主観的把握のもとで聞き手の共同注意を促すからである。なお、ここでいう「共同注意」は、「第一に、他者が注意を向けている対象に自分自身が注意を向けることであり、第二に、自分自身が注意を向けているものに他者の注意を向けさせること」とする(吉田, 2012: 14)。

まずは、「こ」系の指示詞であるが、吉田(2012: 15)によれば、「話し手が占有を主張し、聞き手がすぐに認識できる事物へと、聞き手の共同注意を促す」という。

(k) 「この傘、昨日買ったんです」 (吉田, 2012)

指示詞が話し手中心の体系を有していることについては池上(2004)も指摘していたが、(k)の場面指示用法では、「傘」が話し手に帰属するものであることを指示するとともに、話し手の傘を見ることを聞き手に促す。

次に、終助詞であるが、近藤(2012a)によれば、「ね」は共同注意を求め、「よ」は共同注意を促すとされており、共同注意態勢を聞き手と構築する点で、主観的把握に通じているという¹³⁾。

(l) A:「締切は明日ですね。」

B:「いいえ、違いますよ。」 (近藤, 2012a)

(l)では、Aは「ね」により、聞き手BがAの関心事に注意を向けることを求め、Bは「よ」により、聞き手Aが気づいていない事態にAの注意を促している。

さらに、守屋(2006: 66)は「終助詞使用とともに〈共同注意場面〉を構成することは、表出的な現象文を間主観的な現象文に変換することである。つまり「見え」を直示し「イマ・ココ」に視座を据え、共同で体験的に語ることである。その意味で〈主観的把握(subjective construal)〉に通じる」と指摘している。「そこに、段差がある」は現象描写文だが、「そこに、段差があるよ」は知覚者の「見え」を聞き手と共有しようとしている点で「間主観的な現象文」であるといえる。

最後に、「のだ」であるが、近藤(2012b)によれば、「のだ」は共同注意態勢の構築を聞き手に促す指標として機能するという。

(m) [Bが約束に遅れた]

A: どうしましたか。

B: 事故があったんです/? 事故でした。(近藤, 2012b)

「のだ」がなければ、AとBの発話の関連付けがなくなり、談

話が成立しにくい。すなわち、「のだ」は、聞き手Aが知らない「事故が起きた」という情報を談話の場に導入し、二人が共有している事態(Bが約束に遅れたこと)に関連付けて、話し手Bが理解していることを示すとともに、話し手と同じように事態を理解することを聞き手に促している。

(3) 語りと絵の視点

絵本の分析に先立って、本項では、語りと絵の視点に関する論点を整理しておきたい。

① 三人称小説の語り

本稿では、三人称小説の地の文の語りを検討対象とする。三人称小説は客観的把握をベースとした語りであるが、日本語の三人称小説は主観的把握が現れやすい点で特徴的だからである。

ここでは、「誰が見ているのか」と「誰が語っているのか」を弁別したジュネット(1972=1985)を発展的に継承し、日本語の三人称小説の語りを類型化した山岡(2005)を取り上げる。

山岡(2005)は、誰が知覚し、誰がどこから語っているのかという観点から語りを整理した。三人称過去時制を基本とする英語の小説では、三人称で登場人物、過去時制で出来事がそれぞれ対象化されることから、語り手は物語世界外に指定される一方、日本語の三人称小説では、語り手は物語世界内に移動できるという。この点を踏まえ、日本語の三人称小説の語りの類型を確認していきたい。

まずは、【語りⅠ】であるが¹⁴⁾、物語世界外の語り手が自らの知覚を通して捉えた物語世界の出来事ないしは状況を過去のものとして自らの声で語るタイプを指す(以下の引用は、特に断りがない限り、山岡(2005)に拠る)。

悦子はその日、阪急百貨店で羊毛の靴下を二足買った。紺のを一足。茶いろを一足。質素な無地の靴下である。(三島由紀夫『愛の渇き』)

「悦子は」および「買った」は、「悦子」の「その日」の行動を過去の出来事として語っていることを示しているという。「この日」ではなく、「その日」が用いられていることも、語り手が物語世界外にいることを示唆しよう。なお、四文目で「である」が使われているのは、語り手が語っている現在時から加えたコメントだからである。

次に、【語りⅡ】であるが、物語世界内の語り手が物語世界で起きている出来事ないしは状況をその場で知覚して自らの声で語るタイプを指す。

「おうれ!」男の掛け声にあわせて、馬は渾身の力をふりしぼった。代赭色の体に奇怪な力瘤が盛りあがり、それが陽炎の中で激しく震えた。夥しい汗が腹を伝って路上にしたたり落ちていく。(宮本輝『螢川』)

「ふりしぼった」の「た」は、現在から切り離された「過去」(【語りⅠ】の「買った」)ではなく、現在と結び付いた「完了」を示

しているという¹⁵⁾。「完了」の「た」と「落ちていく」という歴史的現在から、語り手が物語世界内で事態を知覚し、実況中継していることがうかがえる。

つづいて、【語りⅢ】であるが、物語世界内の登場人物の知覚を通して捉えた出来事および状況について、物語世界内の語り手が登場人物の声として再現するタイプを指す。

信雄はしげしげと舟の家を見た。廃船を改造して屋根をつけたものらしい。舟には入口が二つあり、そのどちらにも長い板が渡されていた。人の気配はなかった。(宮本輝『螢川』)

一文目は「見た」の「た」が「完了」なので【語りⅡ】であるが、二文目以下の文は、一文目の「見た」から「信雄」の視点が支配する場面であると判断されるため、「しげしげ舟の家を見た」時の「信雄」の目から見ている存在物・状況について、「信雄」自身が語っていることが示されている(山岡, 2005: 105-106)という。三文目では人称制限が解除され、「信雄」視点の現象描写文となっている。

なお、「渡されていた」の「た」は「発見・気づき」の「た」、「なかった」の「た」は「確認」の「た」であるとされている。「見た」の「た」も含めて、いずれの「た」も、出来事時と結び付いており、語り手が物語世界内に位置していることを示唆している¹⁶⁾。

最後に、【語りⅣ】であるが、物語世界内の登場人物の知覚を通して捉えた出来事および状況について、物語世界内の語り手が対象化して自らの声で語るタイプを指す。

番頭が玄関の外まで送って来て、行っていらっしゃいまして言う。それが皮肉のようにもきこえるし、からかわれているような気もする。西村は少なからず恥ずかしい。恥ずかしさが何となく嬉しくもある。(石川達三『四十八歳の抵抗』)

下線部が【語りⅣ】とされるのは、「恥ずかしい」という心理的述語が用いられていることから「西村」自身の知覚であることがうかがえると同時に、「西村は」からは登場人物を対象化した語り手の声認められるからである。第三者である語り手が「西村」にしか把握できない「恥ずかしい」という感情を代弁できているのは、語り手が「西村」に「自己投入」し、人称制限が解除されたからである。

なお、工藤(1995)がいう描出話法も【語りⅣ】に含めておくことにする¹⁷⁾。「いま自分はこの仕事に打ち込むしかなかった」(『冬の虹』)という三人称小説の地の文は、「その時」などの相対的時間副詞ではなく、「いま」という話し手の発話時を基準とする絶対的時間副詞の使用により、登場人物の内的独白であることを示す一方で、「打ち込むしかない」のように内的独白として再現せずに「打ち込むしかなかった」のように対象化している。「時間副詞は、作中人物の思考(内的発話)時基準の内的視点化とむすびつき、過去形は、作中人物の思考の対象化=外的視点化とむすびつくことによって、〈二重視点化〉が行なわれている」(工藤, 1995: 205)といえる。

②三人称小説の語りにおける主観的把握

それでは、これまで述べてきた語りの類型と主観的把握の言語的指標はどのような対応関係にあるのだろうか。

まずは、心理的述語と現象描写文であるが、これらの人称制限が解除されるのは、語り手が登場人物へ「自己投入」している【語りⅢ】と【語りⅣ】であった。前項の事例では出現していなかった移動動詞についても同様である。

巧は、目をとじる。まぶたのうらがしびれるような眠気が、ゆっくりとやってきた。(『バッテリー』¹⁸⁾)

二文目は、「くる」の補助動詞「てくる」の人称制限が解除され、「巧」の知覚が再現された【語りⅢ】となっている。

次に、歴史的現在であるが、語り手が物語世界外から物語世界の出来事および状況を過去のものとして語る【語りⅠ】では英語の小説と同じく生じにくいと思われるが、語り手が物語世界内から語る場合(【語りⅡ】～【語りⅣ】)では生じやすいと考えられる。

なお、山岡(2005)によれば、現在と切り離された「た」(いわゆる「過去」)と現在と結び付いた「た」(「完了」や「発見」、「確認」など)は物語世界における語り手の位置(【語りⅠ】と【語りⅡ】～【語りⅣ】)を示す指標であるという。

最後に、共同注意であるが、山岡(2005)では取り立てられていないので、補足しておく。

「こ」系の指示詞は、現在と結び付いた「た」と同じく、語り手が物語世界内にいることを示唆する。

のこっていた酒の最後の一滴を飲みほして、バルサはまんぞくげにため息をついた。／(しかし、おどろいたね。)/ここは、都の二ノ宮の館だ。第二皇子の命をすくったとはいえ、バルサは平民以下の異邦人である。(『精霊の守り人』¹⁹⁾)

「ここは、都の二ノ宮の館であった」であれば【語りⅠ】であるが、「ここ」という指示詞により、語り手が物語世界内にいることが示唆されることから、【語りⅡ】であるといえる。さらに、前文のモノローグの通り、「バルサ」が連れて来られた場所に対して、読み手の注意を喚起している。

なかでも、共同注意を促す文末表現は、幼年童話に特徴的である。

今日は、モモちゃんに、すてきなことがありました。モモちゃんにね、電話がついたんです。おもちゃのじゃなくて、ほんとの電話ですよ。黒くって、ぴかぴかしています。(『ちいさいモモちゃん』²⁰⁾)

「んです」は、読み手が知らない情報を導入し、前文に対する説明であることを示すとともに、そのような語り手の解釈のもとで事態を捉えるよう読み手に促している。なお、絶対的時間副詞の「今日は」から語り手が物語世界内にいることが示唆されるので、語り手が説明を加えているこの箇所は【語りⅡ】であるといえる。

さらに、「よ」は語り手が注目している対象へと読み手の共同注意を促し、次文の現象描写文で示されている「見え」へと導いている。

いずれの語りでも、丁寧体であることと相俟って、読み手は聞き手の立場から語り手の認識あるいは知覚を通して物語世界を把握するように誘われているといえる。

③絵の視点における主観的把握

ここでは、絵の視点について、竹内（2002）を参考に整理したい。竹内（2002: 32）の視点論は次の概念から構成されている。

視点対象…見つめられるもの。多くの場合は、画面のなかに描かれている事物である。

視点人物…対象をながめる人物。見る側の人。視点人物は登場人物である場合が多いが、物語の中に存在せず物語の外側にいる場合、物語展開を冷静に見わたす「語り手」のときもある。

視座…視点人物が「対象を見る眼の位置」のこと。作中人物の眼である場合もあれば、中空に仮定された場所のときもある。

見え…視点人物から見た風景。静止した対象像。一点一方向からの画像なので、対象の断片的なイメージにすぎない。

まとめるならば、「見るという現象は、「視点人物」がある「視座」から、「視点対象」をとらえる体験」であり、「そのとき視点対象は、「見え」としてしか知覚されない」といえる（竹内、2002: 33）。

以上の枠組みのもと、読者が登場人物の「見え」を共有する「同一化視点」、「視点対象と並行して視点人物が動く」という「並行視点」、視点対象を後方から追いかける「追尾視点」などを挙げている。

絵本の絵が登場人物視点の同一化視点で固定されてしまうと、視点人物が画面に登場できないことから、絵本の絵では第三者視点がベースになると考えられる。しかしながら、日本語の三人称小説の語りの主観的把握が認められたように、視座を主人公の高さに置いた並行視点や視点対象である登場人物の「見え」と重なる追尾視点については、同一化視点に近い効果が指摘できる。

それでは、竹内（2002）の視点の類型と山岡（2005）の語りの類型は、どのような対応関係にあるのだろうか。

まずは、並行視点であるが、【語りⅡ】に対応していると考えられる。並行視点では視点人物と視点対象との密着度が高いとされており、物語世界内で実況中継する語りに近いからである。

次に、同一化視点であるが、【語りⅢ】に対応していると考えられる。【語りⅢ】では語り手が登場人物へ「自己投入」しており、登場人物の「見え」が再現されるからである。

最後に、追尾視点であるが、【語りⅣ】に近いと考える。登場人物の「見え」と重なりながらも、視点対象として登場人物が画面内に対象化されている点が、登場人物の知覚を再現すると同時に登場人物を対象化する【語りⅣ】と同型であるからだ。

なお、視点対象を捉えるには物語世界内に視座を置く必要があることから、【語りⅠ】に対応する絵の視点は基本的にあり得な

いが、視点対象を遠隔化する「枠」が機能的に対応すると考えられる。

ニコラエヴァほか（2001=2011: 68）によれば、「枠は、通常、絵と読者とのあいだに距離感をつくりだす。枠がないと（つまり、絵がページ全体または見開き全体に広がっている場合）、読者は絵のなかに入っていくような感じがする」という。「枠」は、視点対象を対象化して枠内に閉じ込めると同時に、視点人物（としての語り手）を枠外へと析出するのである。このような作用は、【語りⅠ】において物語世界が対象化されると同時に、そのように語る語り手の存在が析出されることと相同であると考えられる。

3. 絵本の分析結果

本節では、英語に翻訳されている絵本作品を取り上げ、客観的把握傾向を有する英語版との比較を通して、日本語の絵本における主観的把握傾向を明らかにしたい。

(1) 人称制限の解除

本項では、人称制限が解除されている語りを検討する。

①心理的述語

心理的述語については、『とん ことり』に²¹⁾、次のような語りが認められた（「/」は改行を示す）。

そのとき、/とん ことり/げんかんのほうで、ちいさな
ちいさな おとがしました。

引越してきたばかりの「かなえ」の家の郵便受けに、すみれの花東が投函された場面である。「おとがする」という内的情態動詞が使われているが、投函の音を聞いたのは「かなえ」なので、本来であれば、語り手は使うことができない。しかしながら、ここでは、語り手が「かなえ」に「自己投入」しているため、人称制限が解除されている²²⁾。二回目以降は「おとが きこえました」となっているが、「きこえました」も内的情態動詞であり、人称制限が解除されている点は同じである。

「おとがしました」の「た」が「気づき」の「た」であることを踏まえるならば、この語りは、物語世界内の語り手が登場人物の知覚を再現した【語りⅢ】であるといえる。

英語版では²³⁾、次のように翻訳されていた。

It was then *she heard* a teeny, tiny sound, “click pa-tum,” at the front door.

英語版では、知覚主体と知覚行為が補われ（斜体部分）、客観的把握に転換されている。「かなえ」の知覚を通して主観的に語られている日本語版とは対照的である。

絵の視点については、この場面では、並行視点に近い第三者視点から描かれていた。語りと絵の視点は一致していないが、両親の顔が見切れていることから²⁴⁾、視座は「かなえ」の目線に近い高さにある。したがって、登場人物の「見え」が部分的に表現されているといえる（【図1】）。



【図1】『とん ことり』4頁

②移動動詞

移動動詞については、『はじめてのおつかい』に²⁵⁾、次の語りが認められた。

みいちゃんが、うたを うたいながら いくと、ちりん ちりん、べるを ならして、じてんしゃが きました。

ここでは、語り手が「みいちゃん」に「自己投入」し、「きました」の人称制限が解除されている。語り手は「みいちゃん」に近づいてくる自転車を「みいちゃん」の知覚を通して把握する一方、「みいちゃん」が対象化されているので、【語りⅣ】であるといえる。英語版では²⁶⁾、次のように翻訳されていた。

Miki hummed a little tune as she walked along. But suddenly, *she heard* a “ring ring” coming straight towards her! It was a man on his bicycle.

英語版では、音がMiki（みいちゃん）に近づいてくる様子として翻訳され、知覚者と知覚行為が補われている（斜体部分）。Mikiが認識した順序に沿って語られている点で（ベルの音を聞いてから、自転車に乗っている男を認識した）、Mikiに寄り添った語りではあるが、客観的把握である点に変わりはない。

次に、絵の視点であるが、この一文に対応する絵はない。次の文である「みいちゃんは ときんとして、へいに ぺたっと くっつきました」に対応する様子が並行視点で描かれていた。対応する文が異なるものの、【語りⅣ】に対応した絵の視点で追尾視点であることから、語りと絵の視点のずれが感受されると考えられる。

③現象描写文

現象描写文については、既に検討した「げんかんのほうで、ちいさな ちいさな おとがしました」のような登場人物視点の現象描写文が認められたが、絵の視点と一致していなかった²⁷⁾。そこで、ここでは、絵の視点との一致率が高い現象描写文を取り上げる。

『とん ことり』に、次のような現象描写文が認められた。

かなえは、ゆうびんうけから のぞいている おりがみの にんぎょうを わしづかみにして、がちりと、げんかんの ドアを あけました。／しらない おんなのこが、もんから でていこうとしているのが みえました。

二文目では、玄関のドアを開けた「かなえ」に見えた様子が「かなえ」の知覚を通して語られている。知覚行為が言語化されているが、内的情態動詞が使われていることから、現象描写文であると考えて差し支えないだろう²⁸⁾。「みえました」の「た」が「気づき」の「た」であることから、この一文は【語りⅢ】であるといえる。

英語版では、次のように翻訳されていた。

She grabbed the origami doll which was poking through the mail slot, and flung open the door. / *She saw* a little girl she'd never met, about to go through the gate.

英語版では、知覚主体と知覚行為が補われ（斜体部分）、現象描写文が客観的把握に転換されている。

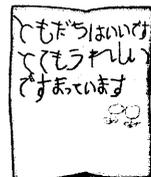
さて、絵の視点であるが、この場面は追尾視点で描かれていた（【図2】）。同一化視点ほどではないにせよ、「かなえ」の「見え」が再現されている点で、語りと絵の視点の一致率は高いといえる。



【図2】『とん ことり』27頁

さらに、現象描写文ではないが、機能的に等価である語りとして【図3】の挿絵が注目される。

とんでいってみると、ゆうびんうけには、ゆうびんがとどいていました。
ふうとうには、なにも 書いてありません。
なかの てがみは、おおきな じで、たった 3ぎょうでした。



かなえは、なんども なんども、そでがみき、よみかえました。
「これは あたしに きた てがみよ。ぜったい そうに きまってる！」

【図3】『とん ことり』18頁

「なかの てがみは、おおきな じで、たった 3ぎょうでした」と「かなえは、なんども なんども、そのてがみを、よみかえました」の語りに挟まれていることから、【図3】の挿絵は「かなえ」の「見え」を語りのなかに絵として再現したものであるといえる。

日本語版では、「ともだちはいいです／とてもうれしい／ですまっています」は絵の中の書き文字として再現されるのみで、語りとしては再現されておらず、いわば現象描写文がゼロ化されていた。

一方、英語版では、“Friends are good. I’m very happy. I’m waiting.”として、「かなえ」の「見え」が対象化され、語り直されていた。

(2) 歴史的現在と「た」

本項では、歴史的現在および現在と結び付いた「た」が使われている語りを検討したい。

まずは、歴史的現在であるが、『はじめてのおつかい』に、次のような語りが認められた。

ひやくえんだまが ころころ、ころがっていきます。あしも
ても、じんじん いたみます。／でも みいちゃんは、お
かねのことが しばいで、すぐ たちあがりました。

「みいちゃん」が坂道で転んだ場面である。「ころがっていきました」と「いたみました」に比べ、下線部のように歴史的現在を使うことで、臨場感が生まれている。なお、一文目では登場人物視点の現象描写文が認められ、二文目では内的情態動詞「いたみます」の人称制限が解除されていることから、【語りⅢ】であるといえる。

英語版では、次のように翻訳されていた。

The two coins in her hand *went* rolling across the road. Her hands and knees *hurt* something terrible but she *jumped* up to search for her coins.

“hurt”は過去形と現在形が同形なため、単独では判断できないが、“went”と“jumped”が過去形であることから、“hurt”も過去形であると考えられる。だとしたら、この場面では歴史的現在が用いられていないといえる。

絵の視点であるが、この場面は、視点対象をクローズアップした第三者視点で描かれていた。クローズアップされることにより、「みいちゃん」の怪我の様子や表情が伝わってくる。歴史的現在との相乗効果により、臨場感が増幅されていると考えられる。

次に、現在と結び付いた「た」であるが、既に検討した通り、「おとがしました」などの「気づき」の「た」が現象描写文とともに使われている事例が散見された。

なお、地の文ではないが、『はじめてのおつかい』の次の台詞の英訳が気になった。

「あつた！」
“I found it, I found it!”

歴史的現在の用例で検討した場面の後で、「みいちゃん」が百円玉を見つけた場面の台詞である。文脈および「！」が付加されていることから、下線部は「発見」の「た」であると考えられるが、英語版では過去形が使われていた。“I have found it, I have found it!”のように、現在完了形の方が「発見」の「た」のニュアンスが表現できたと思われる。

(3) 共同注意態勢

本項では、語り手が共同注意を聞き手に促している語りを検討する。

まずは、「こ」系の指示詞であるが、『14 ひきのあさごはん』に²⁹⁾、次のような語りが認められた。

ここは だいどころ。パチパチ まきが もえてる。

「こ」系の指示詞により、語り手が物語世界内にいることが示されるとともに、読み手は「ここ」が指示する「だいどころ」に対して関心を促される。なお、物語世界内から語り手の知覚を通して語っているので、【語りⅡ】であるといえる。

さらに、この場面では台所風景が描かれているため、読み手は画面に描かれた絵を「ここ」として実際に見ることになる。

英語版では³⁰⁾、次のように翻訳されていた。

At home in the kitchen, the oven’s fire burns bright.

英語版では、「こ」系の指示詞による「見え」の共有化は認められず、客観的把握による翻訳となっている。英語版とは対照的に、日本語版では「まき」がどこで燃えているのかを言語化していないのは、「パチパチ まきが もえてる」は語り手の現象描写文であり、その「見え」が絵として再現されていることから、言語化されなかったのだと考えられる。

次に、終助詞の「よ」と「ね」であるが、『14 ひきのかぼちゃ』³¹⁾に、次のような語りが認められた。

めがでたよ。うまれたよ。あさつゆが ひかっている。ろっくん、そっと そっと しずかにね。

一文目と二文目の「よ」は、読み手に芽が出たことを知らせ、共同注意を促していることに加え、三文目の語り手による現象描写文で示されている「見え」への導入となっている。語り手視点の現象描写文があることから、語り手が物語世界内から自らの声で語っている【語りⅡ】であるといえる。

さらに、「はちも、かまきりも、てんとうむしも いるよ」(『14 ひきのあさごはん』)のように、終助詞が間主観的な現象描写文を形成する事例も認められた。

絵の視点については、語り手との同一化視点で描かれていた。終助詞「よ」との相乗効果によって、聞き手である読み手は語り手の「見え」として画面を認知するよう誘われると考えられる。

なお、このシリーズには、「おねぼうさんは だれ？」(『14 ひきのあさごはん』)など、読み手に対する問いかけが散見される。

この問いかけの答えは、語りのなかでは語られず、読み手が画面のなかを探すようになっており、読み手の共同注意を促していた。

つづいて、四文目の「ね」であるが、「ろっくん」に気をつけるよう共同注意を求めている。読み手が画面内の「ろっくん」に注目する効果もあるが、読み手ではなく、登場人物に対する語りかけである点が注目される。実際、「あれ、くんちゃん まだちいさいのに、ついて いけるの?」(「14 ひきのあさごはん」)など、このシリーズには、登場人物に対する語りかけが散見される。

このような語りかけは特殊である。絵本の語り手は、あくまで機能であり、実在している訳ではないため、実況中継しているにもかかわらず、その声は登場人物には届かないからである。したがって、四文目の「ね」の本来の機能―聞き手である「ろっくん」に共同注意を求めること―は後退すると考えられる。

ここで注目されるのは、この場面における「ね」の副次的効果である。語り手による終助詞使用は、「役割語」として機能することにより³²⁾、語り手を遡行的に人格化するからである。この場合、「ね」により、「ろっくん」を見守っている語り手の像が読み手に結ばれると考えられる。

英語版では³³⁾、次のように翻訳されていた。

“It sprouted!” “Our pumpkin plant is up!” Dewdrops shimmer on the soft, new leaves. “Be gentle with it, everyone.”

英語版では、日本語版のように「見え」の共有を誘うような表現とはなっていないが、引用符を伴っている点が日本語版とは異なっている。この場面に限らず、このシリーズでは、語り手の声と登場人物の声のどちらであるのかが区別できない語りが散見される³⁴⁾。英語では発話者が表示されることが一般的であると思われるが、以上の理由から英語版では発話者が明示できなかったのだと思われる。

最後に、「のだ」であるが、「はじめてのおつかい」に、次のような語りが認められた。

みいちゃんは、とびあがりました。／いままで、ひとりで
でかけたことなんか、いちども なかったのです。

引用したのは冒頭部で、「みいちゃん」が母親におつかいを頼まれた直後の場面である。「みいちゃん」がとびあがったのは初めておつかいを頼まれたからであるという語り手の認識が「のだ」によって示されている。

「のだ」に相当する文法的手段を持たない英語では、次のように翻訳されていた。

Miki had never gone to the store alone before and she was a bit worried.

英語版で“and”以下が補われているのは、「のだ」が内包していた説明を展開するためである。日本語版では、英語版とは違っ

て、「みいちゃん」がとびあがった心情までは言語化していない。「のです」に誘われた読み手がその時の「みいちゃん」の心情を想像する余地が残されている語りであるといえる。

4. 考察と課題

以上の分析を通して、次のことが示唆された³⁵⁾。

人称制限の解除・歴史的現在・現在と結び付いた「た」については、「しらない おんなのこが、もんから ていこうとしてるのが みえました」(「はじめてのおつかい」)において心理的述語と現象描写文の人称制限の解除、「発見」の「た」が認められるように、【語りⅢ】でセットになって使われる傾向が示唆された。一方、英語版では、このような主観的把握は客観的把握に転換されていた。絵の視点については、日本語版の語りに認められた登場人物視点が第三者視点で描かれる傾向が示唆されたが、視座を視点人物に近づけたり、追尾視点にしたりするなど、主観的把握に近づける工夫が指摘できた。

共同注意態勢については、「はちも、かまきりも、てんとうむしも いるよ」のように、現象描写文との共起が示唆された(【語りⅡ】)。終助詞使用については、語り手を人格化する副次的効果が指摘できた。絵の視点については、語りの視点と一致する傾向が示唆された。これは、三人称小説の語り手の「見え」が第三者視点で描きやすいからだと考えられる。なお、英語版では、「よ」「ね」「のだ」に相当する文法的手段がないため、共同注意態勢は反映されていなかった。

まとめるならば、絵本の語りにおける主観的把握については、登場人物の「見え」を通した主観的把握と語り手の「見え」を通した主観的把握が明らかとなった。語り手がゼロ化する前者の語りは一般の小説に認められる技法であるが、語り手が人格化される後者の語りは幼年童話や絵本に特徴的であるといえる。

なお、後者の語りは、読み聞かせ場面において、読み聞かせる者が語り手の位置を占めることにより、読み聞かせられる者との共同注意態勢を構築するのに寄与していると考えられる。

課題としては、サンプルが少ないため、本稿で示唆された傾向が作家に帰せられる可能性が排除できないこと、子どもは語りと絵の視点にしたがって絵本を読むとは限らないこと³⁶⁾、などが挙げられる。分析のサンプルを増やすとともに、幼児の絵本理解の実態を踏まえながら、今後も絵本の語りの特徴を解明していきたい。

【注】

1) ドゥーナンの考え方は次の文章に端的に示されている。「絵本の場合、「読者」ということばは、字義どおりの意味ではあたっていません。描かれたものを眺め、それらがおたがいにどういう“角度”で配置されているかを見てとることで感動するので、すから、「見者」ということばこそが、実態を表しているのではないのでしょうか」(ドゥーナン、1993=2013: 7-8)。

2) 斎藤(2011:457)によれば、「瀬田貞二の『絵本論』(福音館書店、1985)、丸谷才一の絵本の文体を語った『最初の文体』(『日本語のために』新潮社、1974)、そして実践記録として『絵本

- はともだち』(中村 柊子、福音館書店、1997) など数えるくらいしかない」という。なお、これらの文献には、認知言語学的知見に基づく分析は認められない。
- 3) 宮崎 (1985: 139) がいう「〈見え〉先行方略」(「他者の心情を理解するにあたって、まずその他者が彼のまわりの世界についてもっているであろう彼から見た〈見え〉を生成してみる、というやり方) など、共感的理解に基づく事態把握については指摘されることが少なくない。
- 4) ただし、鈴木 (1973) によれば、「親族名称の虚構的用法」は目上の者しか用いることができないという(「息子(=話し手)のことを聞いてくれ」とはいえないということ)。
- 5) 成岡 (2013: 35) では、「キャラクターを示す固有名詞および人称代名詞」と「感情や感覚を表す主観的表現」と「語りかけ表現」が分析の観点となっている。
- 6) 内的情態動詞とは、思考動詞(「かんがえる」等)・感情動詞(「あきらめる」等)・知覚動詞(「きこえる」等)・感覚動詞(「いたむ」等)を指す(工藤, 1995)。なお、心理的述語のシテイル・シテイタ形では人称制限が働かない。池上(2004: 34-35)によれば、「悲シンドイル」という表現は「悲シイ」という表現とは異なり、(私的)な(従って、他者にとってはそれ自体は感知不可能な)心的過程を指すのではなく、むしろ、そのような気持の外面的な現われが見てとれ、〈確認〉できる」からだとされている。
- 7) 「〈状態形容詞〉には、感情・感覚形容詞のほとんどが入るが、そのみに限定されるわけではなく、「空腹だ、好調だ、冷ややかだ」のような形容詞も入る。感情を表す「好きだ、嫌いだ」は一時的な静的現象ではないので「赤い、大きい」のような属性形容詞と同様に、〈特性形容詞〉になる。「無口だ、病弱だ」も一時的現象ではないので、〈特性形容詞〉である」(工藤, 2014a: 45)。
- 8) 「語り」においては(11)の制限(「日本語では、報告の際に、直接知ったこと、または話し手が直接決定できることと、そうでないことを文の形式の上で区別しなければならない」、引用者注)の一部またはすべてが無化される」(金水, 1989: 124)。
- 9) 池上 (2004) は授受動詞も取り上げているが、受領者しか「くれる」を使うことができないという人称制限は世界的にみても珍しいという(英語では「あげる」も「くれる」も“give”である)。
- 10) 山梨 (2015) は、(g)のような、話し手の位置の変化に伴う「見え」の動的変化に加え、「この頃、ドストエフスキーの小説が面白くなってきた」のような文を取り上げ、話し手の能力の変化に伴い、対象に対する認知が動的に変化するタイプなどを指摘している。
- 11) 日本語における過去形と非過去形の交替現象については、池上 (1986:63) が指摘しているように、「歴史的現在」という伝統的な概念ではとても処理しきれない」振幅が認められるが、本稿では伝統的な用法のみを取り上げることとする。
- 12) 仁田 (1991: 36-37) によれば、現象を捉える話し手や聞き手自身は、通常、第三者的存在になりえないことから、「現象描写文のガ格に来る名詞は、原則的に三人称者を指示している名詞に限られ」、新情報を提示するガ格により、「現象描写文は、新たに現象を言語表現の場に導入する」という。
- 13) 綿巻 (2003: 81) は「自閉症事例では、健常児や知的障害児が文法発達の早い時点から獲得し、会話で多用する「ね」の使用が特異的に欠如している。「ね」は欠如していても、終助詞全般が欠如しているのではないことからは、その原因が「ね」の機能や特性に関係していると考えられる」と指摘している。
- 14) 山岡 (2005) では【語り】は【伝達様式】となっているが、絵の視点との対比を際立たせるため、便宜上、変更を加えた。
- 15) 工藤 (2014c: 375) によれば、「[タ]は、終止の位置では、発話以前であること、つまりは過去であることを表す。「昨日来た」のように現在と切り離された過去(正確には過去の完成的運動)を表す場合もあれば、「もう来た」のように現在とむすびついた過去(正確には現在に結果や効力が残っている過去の完成的運動)を表す場合もある」という。ただし、小説の語りでは現実の発話行為時が参照できないことから「ダイクティックなテンスの意味」を持ちえないとする工藤 (1995) の見解に対して、山岡 (2005: 159-161) は「虚構の発話主体(語り手)の発話時に基づいて、テンスの意味が決定される」という立場をとっている。以上の立場から、「語り手が、目の前の事態を、「今」まさに発話時点で完了したものとして語る場合、完了のシタ形式を用い、語り手が、ある事態を、過去のものと判断した場合には、過去時制のシタ形式が用いられる」としている。
- 16) 尾上 (2014: 374) によれば、「状態動詞の意味は非時間的なものであり、運動動詞の場合とは異なって、いつの時点でそれが終了したと言えないから、パーフェクト(運動全体が基準時点において終了済み)という用語は使えない」ため、「基準時点における状態の既存在を表すことになる」という。「あった! あった! こんなところに隠れていた」(発見的現在)、「さっきからずっとここにあった」(状態の現在に至る継続的存在=確認)などが該当。
- 17) 英語の自由間接話法に近いが、山岡 (2005) では、英語の小説の語り手は物語世界外に位置しているため、自由間接話法は物語世界外にいる語り手が登場人物の視点から語るものと定義される。
- 18) あさのあつこ『バッテリー』角川文庫、2003年。
- 19) 上橋菜穂子『精霊の守り人』偕成社、1996年。
- 20) 松谷みよ子『ちいさいモモちゃん』講談社文庫、2011年。
- 21) 筒井頼子さく・林明子え『とん ことり』福音館書店、1986年。なお、「おとうさんと おかあさんは、さっそくにもつの せいを はじめました」の「おとうさん」と「おかあさん」は、語り手が「かなえ」の立場から登場人物を呼称した「親族名称の虚構的用法」(鈴木, 1973)である。英語の場合、“her mother and father”となるが、日本語母語話者であれば、「彼女の」がなくても、語り手の両親であるという誤解はしないだろう。
- 22) 「つぎのひも、おかあさんは いそがしそうでした」では、人称制限が解除されていないことから、語り手が「自己投入」しているのは「かなえ」のみであることが示唆される。
- 23) Mory, Jaylene., & Howlett, Susan. (trans.) (2004) *Gifts*

from a Mailbox. Tokyo: R.I.C. Publications.

- 24) 家の中の場面では「かなえ」を閉じ込めているかのようなフレームがラストで遊びに出かける場面では拡大され、「かなえ」の解放感を表現していた。
- 25) 筒井頼子さく・林明子え『はじめてのおつかい』福音館書店、1976年。
- 26) Howlett, Peter., & McNamara, Richard. (trans.) (2003) *Miki's First Errand*. Tokyo: R.I.C. Publications.
- 27) 語りと絵の視点が一致しない事例として、一人称語りの現象描写文が挙げられる。たとえば、にしまきかやこ『わたしのワンピース』（ごくま社、1969年）には、「まっしろなきれ／ふふわわって／そらから おちてきた」という現象描写文がある。「てくる」により、知覚者のもとに「きれ」が近づいてくる様子が主観的に語られている。一方、絵の視点であるが、この場面は「きれ」の上方に視座がある俯瞰視点で描かれており、「まっしろなきれ ふふわわって じめんへ おちていった」に対応する構図となっていた。このような視点の転換が行われたのは、登場人物視点で描いた場合、「きれ」の下側が眼前に広がる構図になるため、状況が把握しにくいからだと思われる。一人称語りの絵本では、現象描写文が生起しやすいが、視点人物が画面に登場できないこともあり、同一化視点が採用されることは多くないと思われる。ちなみに、かやもとあきら監督『わたしのワンピース [DVD]』（トライネットエンタテインメント、2005年）の英語字幕では、“A piece of pure white cloth floated down from the sky.”と翻訳されており、知覚者のもとに近づいてくる主観的把握は認められない。
- 28) 仁田 (1991) は、「現前状況を表す現象描写文」として、「ほら、向こうに山が見える」や「隣の部屋から話し声が聞こえる」などの内的情態動詞を述語に取るタイプを例示している。
- 29) いわむらかずお『14ひきのあさごはん』童心社、1983年。
- 30) Binard, Arthur. (trans.) (2005) *The Family of Fourteen Fix Breakfast*. Tokyo: Doshinsha.
- 31) いわむらかずお『14ひきのかぼちゃ』童心社、1997年。本作では、「ゆっくり おやすみ たねさん、よっちゃんがいうと、しっかり めを だしてね、となっちゃん」のように、語り手の声と登場人物の声が区別されている箇所が散見される。
- 32) 金水 (2003: 205) によれば、「ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができる時、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる時、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ」という。
- 33) Binard, Arthur. (trans.) (2005) *The Family of Fourteen Grow a Pumpkin*. Tokyo: Doshinsha.
- 34) 「現在の日本語における「ノ DEAL」 という表現形式の存在と頻用（これによって「出来事の時間」は「発話の時間」の中にいわばくめ込まれてしまうということ）、さらに直接話法と間接話法（そして単なる地の文）との間の表現上の区別の相

対的な曖昧さ、文の主語＋目的語と目されるものを明示することなくすませる容易さ—こういったことすべてが、語り手と語られる対象という主客の対立を常にはかす方向に働いている」と池上 (1986: 72) が指摘しているように、声の帰属先の曖昧さも日本語の小説の特徴だといえる。

- 35) 以下の通り、成岡 (2013: 457) の分析結果とも重なるところが少なくない。「英語版ではキャラクターを示す固有名詞や人称代名詞が頻繁に使用され、それにより語り手がコンテキストの外側から場面を見て、客観的に描写する視点が観察された。それに対し、日本語版では、語り手は客観的に描写する視点だけでなく、感情や感覚を表現する際に主観的な形容詞表現などを用い、視点がキャラクターに移り表現されていることも多く見られた。終助詞や「おやすみなさい」というあいさつ表現を使用することにより、語り手自身もコンテキストに入り込み、キャラクターや読み手に語りかけるような表現方法もされていた」。
- 36) 福田 (1996: 188) によれば、「高学年では、視覚的イメージの視点情報を利用することによって、明示的視点表現（「来る」など、引用者注）を含む空間配置の課題をより良く解決できる」という。裏を返せば、福田の知見は、絵本の読者対象である幼児が語りと絵の視点を関連付けて理解できていない可能性を示唆していよう。

【文献】

- 池上嘉彦 (1986) 「日本語の語りのテキストにおける時制の転換について」日本記号学学会編『語り—文化のナラトロジー—』東海大学出版会
- 池上嘉彦 (2004) 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標 (2)」『認知言語学論考』No. 4
- 池上嘉彦 (2006) 「〈主観的把握〉とは何か—日本語話者における〈好まれる言い回し〉」『言語』35巻5号
- 尾上圭介 (2014) 「タ」日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店
- 金水敏 (1989) 「「報告」についての覚書」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 工藤真由美 (2014a) 『現代日本語 ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房
- 工藤真由美 (2014b) 「歴史的現在」日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店
- 工藤真由美 (2014c) 「タ」日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店
- 近藤安月子 (2012a) 「第43課 「よ／ね」」近藤安月子・姫野伴子編『日本語文法の論点43』研究社
- 近藤安月子 (2012b) 「第25課 のだ」近藤安月子・姫野伴子編『日本語文法の論点43』研究社
- 斎藤淳夫 (2011) 「ことばの表現 (2): 文体」中川素子ほか編『絵本の事典』朝倉書店

- ジュネット、ジェラルム (1972=1985) 花輪光ほか訳『物語のディ
スクール 方法論の試み』水声社
- 鈴木孝夫 (1973)『ことばと文化』岩波新書
- 竹内オサム (2002)『絵本の表現』久山社
- ドゥーナン、ジェーン (1993=2013) 正置友子ほか訳『絵本の絵
を読む』玉川大学出版部
- 成岡恵子 (2013)「絵本における語り手の視点：英語絵本とその
日本語翻訳の質的分析」『東洋法学』57 巻 1 号
- ニコラエヴァ、マリアほか (2001=2011) 川端有子ほか訳『絵本
の力学』玉川大学出版部
- 仁田義雄 (1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 姫野伴子 (2012)「第 8 課 体験者の移動」近藤安月子・姫野伴
子編『日本語文法の論点 43』研究社
- 福田由紀(1996)『物語理解における視覚的イメージの視点の役割』
風間書房
- 藤本朝巳 (2007)『絵本のしくみを考える』日本エディタースク
ール出版部
- 宮崎清孝 (1985)「心情の理解と視点」宮崎清孝・上野直樹編『視
点』東京大学出版会
- 守屋三千代 (2006)「〈共同注意〉と終助詞使用」『言語』35 巻 5
号
- 山岡實 (2005)『「語り」の記号論 日英比較物語文分析 増補版』
松柏社
- 山梨正明 (2015)『修辭的表現論－認知と言葉の技巧－』開拓社
- 吉田一彦 (2012)「第 3 課 「そ」」近藤安月子・姫野伴子編『日本
語文法の論点 43』研究社
- 綿卷徹 (2003)「終助詞「ね」と人・関係指向の会話－自閉症児
の会話分析と座談会の会話分析から－」『國文学－解釈と教材
の研究－』10 月号